

書

評

# 『2010年 日本の経営』

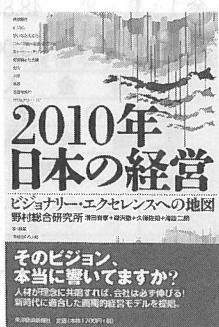
増田有孝他著 東洋経済新報社 定価1,785円

二〇一〇年といつてももう後数年。この間に何が変わっていくのだろうか。そんな疑問を持つて、ごつごつしたタイトルのこの本を読んでみた。企業組織の持つビジョンや理念をどう経営全体に根づかせるかについての本である。

経営者は理念の重要性を連呼する。しかし人といふものはやめろといわればやりたくなるし、やれといわれればやめたくなる。厄介である。理念を叫んで優良企業ができるのなら、産業社会ほどに楽な社会もない。

つまりところキーワードは人である。人材という資源が着実に重要性を増す昨今、人についてのマネジメントの根本的変化を本書はかなり正確に捉えている。

これからは「大型の人材から猫型の人材をマネジメントする時代に移行



する」という。まことに言い得て妙である。忠誠心が強く小屋で飼われる犬と、自由奔放で気ままな行動を旨とする猫とでは行動様式が違う。

そもそも大方の猫には自分が飼われているという意識がない。逆に人を飼っているくらいのつもりである。何気ない比喩ながら、人が企業を必要とした時代から企業が人を必要とする時代に変化の構図がきちんと射程に収められている。

事実、九〇年代の雇用状況は急激に構造変化した。大企業を中心とするリストラのみならずパート・派遣労働者の主力化で正規・非正規労働の区分さえわからなくなつた。

しかし、大事なのはここから

だ。人材が多様化したからとて言つて、理念の重要性が減じるわけではない。むしろ人材の多様化を現実とするならば、それらをどう組織化して生産性を高めるかがマネジメントの重要な役割とならざるをえない。

つまり論点は二つある。一つは理念を実践原理として機能させることに成功した企業の別名と言つていい。逆に失敗すれば優良人材をとどめておくことはできず、競争力を失うこととなる。

一例としてストーリー・テリンゲがある。アメリカでは学会や研究会が山ほどできるまでの盛況ぶりだという。理念をお仕着せではなく、働く者にとって個々の物語として再構成し、伝えた実践への橋渡しとする。理念を訓辞として唱和させるではなく、実践として躍動させ空念仏となるのを防ぐ方法である。

本書で述べられていることは、マネジメントについての一般通念の変化を如実に反映している。もはやマネジメントとは企業トップのための手法にとどまらないし、企業特有のものとさえいえない。個を中心として組織的生産活動を営むすべての者のための手法となる。

そして変革の重要な補助線とは常に「温故知新」である。ビジョンや理念といった、ともすれば古く見られがちのものを現実的な文脈で生き生きと解釈し実行せよとする。事例も楽しいものが多く、示唆に富む本と思う。

森里陽一  
社会生態学研究者



書評

『2007年 団塊定年! 日本はこう変わる』

原田泰・鈴木準十・大和総研著 日本経済新聞社 定価1,575円

本の読み方に決まつたスタイルなど存在しないと思うが、用途については大きく分けて二つある。読書そのものが目的である場合と、他の目的を達成する手段として読書する場合である。

本書は確実に後者である。団塊の世代の大量退職という、着実に現実感を増す近未来について、必要最小限の情報と視点を与えてくれる。この占いで本書はかなり役に立つ。

大方にとつて、一〇〇七年から二〇〇九年にかけて、いわゆる団塊の世代が大量に職場を去るのはわかっていた。彼らが手にし、年金生活を始めるなり新たな事業を始めたりするのもわかつていた。にもかかわらず、それらを客観的にきちんと伝える書物や記事にほんとどお目にかかるたこと

本の読み方に決まつたスタイルなど存在しないと思うが、用途について大きく分けて二つある。読書そのものが目的である場合と、他の目的を達成する手段として読書する場合とである。

とがない。  
もちろん、自らの感性的情報をもとに未来をある程度思い描くことはできる。団塊の世代に

ついても、多くがとつてきア  
プローチがこれだつた。  
だが、主觀的判断は多くの場  
合、希望的観測や思い込みと紙  
一重づつ。 (長谷川、二三きりこ)

一重である。最低限 基礎的な  
データを武器としなければ想像  
力も發揮されることがない。そ  
れに、団塊世代はひとくくりの  
安直な世代論で表現しつくすに  
は、あまりに多様な存在である。  
ミ、モ、ラ、の場合は、上記とは、

また多くの場合、世代論はあまりに単純化され、しばしばそれらが独り歩きする危険性をはらむ。とくに団塊の世代に対する「一般的」観念は、好悪等の感情を過分にはらむだけに、

危険性は大きい。にもかかわらず、彼らの考え方や行動が、今後の日本社会に与える影響はあまりにも大きすぎる。

そもそも「団塊」という量的な概念で規定されるように、団塊世代の大量退職とは、より覚醒した視角から捉えれば、世代

人「問題であるとかわかる  
これまでも、少子化や高齢化の  
問題にしても、それらにともな  
う就学、就労の問題を醒めた人  
口問題として捉えることは、あ  
まりになされてこなかつたの  
が、見直さねば。

が現実であつた。  
考えてみれば、人口問題としての視点は、大きなトレンドとしてきわめて誤差の少ない有利な道具である。この便利な道具を活用しない手はない。その点

からすれば、民間シンクタンクによるマクロ・ミクロ指標を多く用いた本書の切り口は、現状判断に重要な視座を提供してくれる。

データの充実のみではない。基礎的な経済データをもとにしつつ、非経済的な諸現象にも踏

み込んだ視座を提供しようとし  
ている。格差や離婚問題、そし  
てNPO活動への流入にも一定  
の見解を示している。

おそらく、団塊の世代が大半を過ごした時代環境は、主として経済的要因が政治・社会等の趨勢を決定したのに對し、彼ら

が退職後第二の人生を生きる時代環境は、非経済的要因に裏付けられる趨勢が主流となる。この点について経済・非経済の両面が補完的に目配りされるのはありがたい。

さらには、その将来像を読み解くには、定量データを基礎としつつも、指標と現実を架橋する豊かな想像力が求められる。本書で示されるデータや切り口を武器として、副題にある「こう変わる」の「こう」にあたる部分の輪郭が創造力とともに明確になつてくる。

今後の経済社会の大きなトレンドをつかむのに、手元において損はない本だと思う。



## 『ウェブ人間論』

梅田望夫・平野啓一郎著 新潮新書 定価714円

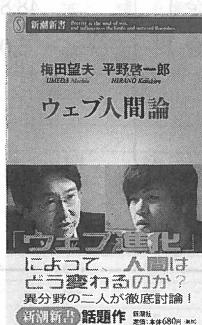
『ウェブ進化論』の梅田望夫氏による新刊である。ウェブ二・〇への展開を鮮やかに描いたものが前著だつたとするならば、ウェブというアリアドネの糸をたぐつて、人間社会のありようがいかに変化しつつあるかを描くのが本書である。

文学者平野啓一郎氏といふ絶妙の対談相手を得て、奥深い議論が淡々と展開されている。

この本を読んでみて、まず浮かんだのは一つの問い合わせだつた。ネット上世界がすでに成立しているのか否か――。

評者自身いくつかのブログを毎日見てゐるのだが、活字の世界をはるかに超える豊かな地平が開けているようにさえ思える。執筆者はおしなべて無名の個人であり、この世界のどこかでひとつと生きている「誰か」である。

それぞれに生活があつ



を変えれば、われわれの生活に現実的な力を持ちつつあるということである。

地下生活者のうめきは、十九世紀にあつては、「胃が悪い」「かんしゃく持ちである」といった私的な意味しか持ちえなかつた。砂漠に落ちる一滴のしづくのように、一瞬むなしく地を湿らせて消えゆく運命だつた。今はそうではない。私的なうめきや喜びが、小さいながらも確実に大地の生成に力を添えている。

それは社会現象というのみにとどまらない。すでに、現実の経済にも巨大な力を持ちつつある。考えてみれば、グーグルもユーチューブもiポッドもみなこのようないくつかの原理を利用して立ち現れる。アイデアは素朴なれ、一世の支持を勝ち得るのもそのためである。人間にとつて私的な部分ほどにリアルなものはないからだ。

しかもそれらは、従来の資本主義が特有に持つ、利潤への欲求すらをも解き放つ力強い生命

力に満ち溢れている。

本書の魅力の一つは、全体を一貫するごくふつうの人間への信頼である。ゆえに樂観的であって、ともすれば持たれがちな憂鬱な未来をさわやかに笑い飛ばしてくれる。

すでに、現代の日本人は、携帯電話やPCといった情報ツールを手にする以前の状態をうまく想像できなくなっている。それはあたかも戦前の日本を見るかのように、リアリティが断絶している。どこかを境に、決定的な何かが変わってしまった事実を傍証している。

多くの場合歴史の決定的瞬間を見抜く役割は、芸術家によるものであった。このことをもう一度われわれは想起すべきなのかもしれない。

そう考えると、この対談はテクノロジーやビジネスの専門家と文学者という、一見相容れない者同士に見えながら、なかなか鋭い着眼点のものに仕組まれたものであることが、理解されるとと思う。

ら溢れている。の魅力の一つは、全体を  
るごくふつうの人間への  
ある。ゆえに樂観的で  
ともすれば持たれがち  
は未来をさわやかに笑い  
てくれる。  
に、現代の日本人は、携  
々PCといった情報ツー  
にする以前の状態をうま  
きなくなっている。そ  
たかも戦前の日本を見る  
に、リアリティが断絶  
る。どこかを境に、決定  
が変わってしまった事  
証している。  
の場合歴史の決定的瞬間  
、役割は、芸術家による  
めつた。このことをもう  
われは想起すべきな  
れない。  
うえると、この対談はテ  
ンやビジネスの専門家  
君という、一見相容れな  
工に見えながら、なかな  
看眼点のもとに仕組まれ  
があることが、理解され  
。

書

評

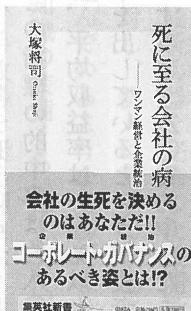
# 『死に至る会社の病—ワンマン経営と企業統治』

大塚将司著 集英社新書 定価756円

「死に至る病とは絶望のことである」意味深い箴言からはじまる異色の会社論である。著者についてはご存じの方も多いだろう。元日経新聞の辣腕記者で、九年五六年「三井銀行・東京銀行合併」のスクープで新聞協会賞の受賞歴もある。

二〇〇三年に、日経子会社で発生した巨額不正経理事件について、株主総会で社長の経営責任を追及したハイスクル・ブローアーとしての前歴をも併せもつ。企業論や株式会社論に詳しい研究者は少ないが、その論理的矛盾を突き、自ら行動した者はおそらく本書の著者くらいなものではあるまいか。

いわば切れば血の出る会社論であり、そこには秘めたる熱情と冷徹な頭脳が見事なまでに同居している。



約一年前のライブドア事件について地裁判決が出たばかりだが、ここ数か月でも、不二家や日興証券、パロマなど新たな企業をめぐる不祥事が頻発している。改めて思い起こすまでもなく、これほどまでに企業不祥事が頻発する状況はなかった。これは間違いない。

本来株式会社とは、資本を分散所有することで権力・リスク集中の抑制均衡を図る仕組みであり、これは人類の生み出した最高発明品の一つとも称される存在であった。

では、なぜそのような仕組みのなかでワンマン経営が瀕死し、自社ひいては社会にまで害悪を及ぼすようになったのか。ここに本書の中心的問いがある。

「どのように」悪いのかである。著者は、株式会社発祥時のヨーロッパから近年のエンロンやワールドコムにいたる巨大企業の制度的背景をつぶさに観察し紹介している。

その過程で明らかとされるのは、ワンマン経営者が個として、あるいは人間として邪悪である（むろん少なからず例外もある）。実際彼らの多くは高度な見識ももつ有能な人物たちだつた。

第一に、経営者個人が組織を通じて自らの利益を最大化すること、社員のみならず社会全体の利益が損なわれるリスクがある。

第二に、ワンマン経営者が周囲にイエスマントをばら撒けることで有能な人材を排斥し、企業価値の源を毀損する。

第三に、これがある意味で最も重要なことだが、それによって蒙る害悪の責任を経営者個人はとらず、説明責任も果たされない。組織や社会に付けが回される。

だが、企業とはその危険性を放置して安穩としているにはあまりにも社会的な影響の大きさに存在となってしまっている。では何をすべきか。

仕組みをつくるしかない。しかもその仕組みは、現実に合わせて変えられるものでなくてはならない。ここがポイントであろう。

「死に至る病」とはデンマークの哲学者キルケゴーの語である。しかし哲学者はこうもいつていう。「絶望していい状態、それこそが眞の絶望なのだ」と。

絶望はあるのままに絶望されなければならない。そこに希望の種子が宿るからだ。

社会生態学研究者 森里陽一

書

評

## 『下流志向』

内田樹著 講談社 定価1,470円

ここしばらく流行のト  
ピックである。

なぜ若者は三年で辞め  
るのか、なぜ会社選びに  
失敗するのかなどなど似  
た趣旨の本が多く出てい  
てよく読まれているよう  
だ。

読者層は若者だけでは  
ない。管理職あたりの年  
齢の人々にも読まれてい  
るのだという。

若者はこれまで文化  
や創造において常に注目  
される存在だった。だが  
が、彼らの学業や就職に  
まつわる生態がこれほど  
までに多くの関心を集め  
たことはなかつた。

大学教師である著者は、  
は、しばしば学生から  
「この授業を受けてどん  
ないいことがあるのです  
か?」という問い合わせ  
たという。なぜ若者が学  
びを拒否するのか、労働  
を敬遠するのかを解く鍵  
を著者はこの問い合わせのなか

に見出している。

ポイントは、学業・就職に積

極的でない人々、いわゆる二  
トとかフリーランスといわれる層  
の内的動因の変化にある。タイ  
トルにも現れているように、彼  
らは怠惰ではない。逆に自ら志  
し、努力を重ねてそのようなボ  
ジションを手に入れたとする。

著者は、一般的なイメージとは明らかに  
異なるのだが、とても説得力がある。  
なぜだろうか。

著者は、内的動因の変化の一  
つとして、現在の世代が、生産主  
体としてではなく消費主体とし  
て自我を確立したからだとする。  
日本が今ほど豊かでなかつた  
頃、子どもは労働力でもあつ  
た。誰でも覚えがあるだろう。



さすがに工場労働はさせられな  
いままでも、買い物や大掃除など  
お手伝いの主役は子どもだつ  
た。その時代の子どもは家族や  
社会への奉仕からスタートせざ  
るをえなかつたという。

では今はどうか。家電製品な  
どの普及で、家庭内の仕事はさ  
ほど多くない。お金を持つてい  
けば、子どもだろうと誰だろう  
と対等にサービスを提供してく  
れる。いわば、世間の万事を等  
価交換と見なし、そこに自らを

位置づけることに慣れてしまつ  
た。そうである以上、わざわざ  
勉強の苦痛や就業の意味がうま  
く見出せなくなるのは当然とい  
うことらしいのだ。

先の問いは、著者によれば、  
「授業を黙つて受ける苦痛を  
補つてあまりある果実をあなた  
は提供できるのか」という意味  
となるほど――。

問題はこれからだ。学者の割  
事のすばらしさをもう一度大人  
たちがきちんと自己確認し、自  
らの行動を通して示すのが結局  
は近道なのかもしれない。

著者の問いは、著者によれば、  
「授業を黙つて受ける苦痛を  
補つてあまりある果実をあなた  
は提供できるのか」という意味  
となるほど――。

著者の考えは、「彼らを放つ  
ておけない」ということ。若者  
はいつまでも若者ではない。今  
はいいが、数十年後どのような  
社会が出来上がるかを考えるな  
らば、確かにそのとおりである。  
しかし、一度確立した価値観  
を転換させることなど、できる  
のだろうか。小手先の技で人の  
考え方を変えられるくらいなら、  
誰も苦労しない。そもそもそん  
なことは不遜ではないのか。

多分ここで一つの視座が、教  
育への期待なのだろうと思う。  
教育は照れることなく理想が語  
れる数少ない領域の一つだから。  
『星の王子様』の作家サン・テク  
ジュペリは、船を造りたいなら  
仕事を割り振るのではなく、人  
に海のすばらしさを教えよと述  
べたという。

時間はかかる。でも学びと仕  
事のすばらしさをもう一度大人  
たちがきちんと自己確認し、自  
らの行動を通して示すのが結局  
は近道なのかもしれない。

社会生態学研究者

森里陽一

書

詩

「なぜあの人の解決策はいつもうまくいくのか」

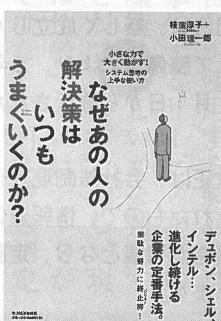
枝廣淳子著 東洋経済新報社 定価1.680円

よくあるビジネス・ハウツーものと、ひと味違  
う。

最近若手のビジネスマンを中心に、「システム思考」という方法論が注目を集めているという。その考え方を実践に即してやさしく解説するものである。

システム思考とは一九五〇年代にMIT(マサチューセッツ工科大学)の研究者を中心を開発された手法で、すでにデュポンやシエル、インテル、GEといった世界的大企業で導入され成果を収めているという。

いわば物事を個体としてではなく、全体から有機的なつながりとして見るアプローチである。「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざがあるが、要はあれである。世の中何が何につながっているか事後的にしか確認できないことばかりである。それら錯綜した因



が多くの関心を呼び、関連書もたくさん出た。システム思考はロジカル・シンキングのカバー不能な領域（泣き所）をたくさんに突くことで支持を拡大していくよう見える。

というのは、ロジカルの場合、本来複雑な世界をいくつかの主要要素に還元し、マトリクス化する。これはこれでとりとめもない状況から重要な切り口を見出すのに役に立つ。しかし、単純化しようとすると、いきおい後々重要になる変数を切り捨てたり、その逆をしてしまったりする。

システム思考の場合は、個体の「間」に本質が宿るとする考え方である。奇しくも日本語では人の間と書いて人間と読む。それは一つの関係性であり、その関係性を解釈することで、全体のシステムの意味を読み解き、そこに働きかける。「ここで掲げられる「システム思考七ヶ条」なる実践原則があり、なかなか興味深い」を責めない

二 出来事ではなく、パターンを見る。

三 「このままパターン」と「望むパターン」のギャップを見る。

四 パターンを引き起こして見る構造を見る。

五 目の前だけではなく、全体像とつながりを見る。

六 働きかけるポイントをいくつも考える。

七 システムの力を利用する。

読んですぐ役立てられるといふものではないかもしない。しかし人はともすれば目の前のわかりやすく手つ取り早いものを求めがちで、それらは結果として間違っていることが多い。みすみすありがちな間違いを繰り返してしまうこともある。根治策に徹しようとしても、それがどこにあるのかわからない。評者を含め、そんな悩みを持つ方は多くいるはずだ。少なくとも、一時間で読めて即役に立つと謳う昨今のビジネス書は、一線を画する奥深いものがある。

社会生態學研究者  
森里

書

評

# 『P·F·ドラッカー 理想企業を求めて』

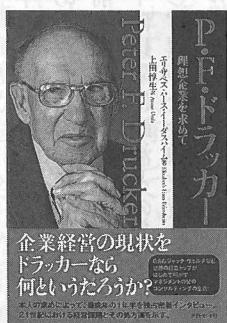
E·イーダスハイム著(上田惇生訳) ダイヤモンド社 定価1,890円

二十世紀最高の哲人とされるドラッカーについての本がまた現れた。『マッキンゼーをつくつた男マービン・バウワール』などの著書がある元・名コンサルタントによるものである。

晩年に行われたインタビューの成果も盛り込まれおり、ドラッカーのものの見方と著者自身による経験と知恵が一つの坩堝のなかで溶解した感がある。今後現れるであろう彼にまつわる書物のベンチマークとなりうる一冊だ。

まして経営のありようやM&Aなど問題の山積する日本の現状を考えうえで、彼の教訓に学ぶのは今も大切と思う。

本書はいわばドラッカーの使用法である。すぐ役に立ちそうな例が実際にたくさん出てきて参考になる。わけても情報技



術を駆使し、コラボレーションに成功した企業の事例が全体で際立っている。

ドラッカーは二〇〇五年に亡くなる直前の齢九〇代前半まで、情報技術やグローバル化のもたらす諸問題について倦むことなく発言し続けた。晩年の著作、たとえば『ネクスト・ソサエティ』(二〇〇二年)などでその重要な補助線は繰り返し示された。

この本の魅力は、現在から未来にかけて起こりつつある変化、わけても企業経営に関する本質的变化への視点にある。取り上げられるケースは、よく知られたものが多く、あつと驚く新事実が示されているわけではない。しかし一見だれでも知つても何もはじまらない。それどころか、行き過ぎると確實に人や組織を損なう。学ぶべきは彼のよりどころとした価値観であり、ものを見るうえでの姿勢である。

「知識は教えることはできないが、学ぶことはできる」。学ぶとは方法を自らのものとし、自らのあまりに具体的な活動に適用するとの同義である。本来すぐれた仕事の方法とはそのようにして広まつていくものと思う。

換言すれば、ドラッカー的思考という道具ないし補助線があるとすれば、それは使う人の偏見や美意識から自由ではあります。それ以前にドラッカーは、本書の強みとなっている。本書は、ドラッカーを手段として使いこなすとした最初のものといつよい。ドラッカー自身も、マネジメントとは手段であるとしつづけている。人とぞの頭脳をそれぞれの仕方で刺激し、研ぎ澄ましてくれるところに彼の個性があつた。

だが、人間としての彼を追慕しても何もはじまらない。それどころか、行き過ぎると確實に人や組織を損なう。学ぶべきは彼のよりどころとした価値観であり、ものを見るうえでの姿勢である。

固有の価値観や美意識をもつてグローバルなまでに生き現実に具現化するのは、勇気のことだ。しかも現に今生きる者にしかなしえない。とするならば、ドラッカーの仕事を使いこなすのはこれからであり、本書はいわば使徒行伝の序にほかならないということである。

社会生態学研究者  
森里陽一

## 『21世紀の国富論』

原丈人著 平凡社 定価1,470円

未来の種は現在にあるはずである。細かく無作為にまき散らされた無数の種が、未来にいかなる森として繁茂するのか。久しぶりに地に足着いた技術・社会論を読んだ。何よりもリアリティの塊である。自らの技能と努力を糧にアメリカで成功したベンチャーキャピタリストの所論としても示唆に富む一冊である。

いくつかの柱からなるのだが、その一つは経済社会に関するものであり、具体的にはファンドに象徴される市場万能主義への危惧として表れる。外資系ヘッジファンドの急襲がメディアを賑わせているが、企業の価値を決定するという。だが本書でこの種の思想は痛烈に批判される。というよりも否定される。そもそも企業は株

主のものではないという。アダム・スミスが今生きていたら、きっとこの著者と同じことを言つただろう。実際に働く人々にとつて、株主重視とは空念仏にほかならず、そもそも国富の本質は労働のありようにかかっている。

企業は短期であれば誰でも経営できる。反対に長期であつても誰でも経営はできる。しかし短期と長期のバランスを保つところに経営の機能がある。そこに絶対的な調和は存在しない。少なくとも理屈できれいに説明できる世界ではない。多くの日本人が口にこそしないものの内心感じていることである。

ちなみに、理論偏重のビジネススクール的知識の信頼性に疑問符が付けられるのもそのためである。企業も人間も同様に生き物であり、状況に合わせたコミュニケーション手段としてのデジタル産業の未来である。

もう一つは技術論、すなわち著者が七〇年代後半にIBMのパソコンを購入し使用したとき、立ち上がるまでに二分かかる。やはり二分から三分かかる。使い勝手から見たら、いさかっただといふ。では今はどうか。モノとハートをつなぐキーワードは「使い勝手」だ。

ソフトとハードの融合、すなわち本書でいう「知的工業製品」がモノとハートをつなぐキーワードとなるならば、繊細なものづくりの風土や勤勉の美德が生きてくる。欧米への過剰反応ではなく、自らの強みを伸ばすことできつて日本は世界のお役に立てるというわけである。

そこにはさりげない現場の感性と卓抜な歴史観が息づいている。著者は市井の考古学者でもあるという。古代へのロマンは、未来への想像力をも同時に刺激するのに違いない。

トワーク機器のありようを展望し、おそらく二〇一五年、つまり一〇年経たないうちに現在のネットワークのありようは一変するはずだという。

日本は携帯電話の機能性からも窺い知れるように、ユーダーの立場、すなわち使い勝手の視点から設計・製造するのに秀でている。ここが日本の最大の強

国富論  
原丈人

シルバーライフ  
A New Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations  
George Hart

日本は、  
このチャンスを  
生かせるのか?

著者: 原丈人  
出版社: 平凡社  
定価: 1,470円  
発行年月: 2007年7月

森里陽一  
社会生態学研究者

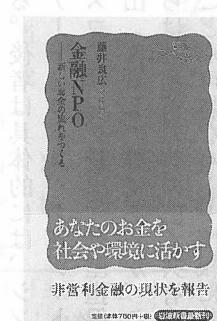
# 書評

## 『金融NPO』

藤井良広著 岩波新書 定価 819円

グローバル化といわれるが、世界の断絶はかえつて深くなっているのではないか。情報化といわれるが、社会はますます閉塞しつつあるのではないか。動植物が生きる自然も生態系なら、人間が生きる社会も生態系である。そこでは隠れ家という領域が必要とされる。昔からそんな辺境のような場所がある、文化といわれるものが培われてきた。他方、現代の人間社会は、そのような場の欠如から来る酸欠状態に見える。

そんな淡い失望をもつて生きていると、こんな本の存在が嬉しくなる。まだ捨てたものじゃないという思いとともに、行動に向けて背中を押してくれる。やはり人間社会も生態系であり、



独自の作法で呼吸し、鼓動を維持する、その当り前の事実を確認させてくれる。

テーマはお金である。お金に人格はない。確かにその通りだ。今や主要国のGDPを上回るような額が瞬時にやりとりされる時代である。そんなものにいちいち人格があつてはたまつものではない。

世界を一瞬で飛び越えるM&A資金もお金なら、明日のお米代もお金である。お金は手段であり、人のもつ価値や欲望のシンボルである。もちろん、人は自らの欲望充足のためにお金を必要とするし、お金を集めたいと思う。

だが本当にそうなのか。三島由紀夫はかつてこう言つた。「人間というものは、自分自身のためだけに生き、自分自身の

会も生きる。いわば公と私の触媒として働いてもらうことがでかいと願う。私的な欲望を超えての憧れがある。そこにお金を使えるとき、お金も生きるし、社会も生きる。いわば公と私の触媒として働いてもらうことがでかいと願う。私的な欲望を超えての憧れがある。そこにお金を

ためだけに死ねるほど強い存在ではない」。

人は理念を必要とするし、自らよりも圧倒的な何かに貢献したいと願う。私的な欲望を超えたところに存在する、何ものかへの憧れがある。そこにお金を

集め、意味ある投資を行い、そして収益を挙げるプロとしての厳しさである。ゆえに世間でいわれるNPOとはひと味違う。もちろんNPOは利益を第一とするものではない。しかしかかる事業といえども、砂に細かく水をまき散らして、稀少な資源を無駄にすることとは許されない。わけてもお金についてはなおさらであり、甘えの許されない世界である。

さらに数多い事例のすべてについていえることがある。まず理念を訴え、コミュニティをつくり、次第に機能を獲得するという一連の流れである。これらがプロの仕事として行われる。すばらしいことだ。

地球環境、貧困対策等々理念は異なれど、彼らがつくり発展させようとするのは、企業にもみが世界でも日本でもNPOの形をとつていくつも進んでいる。本書の克明なルポを読み、まづ思うのは、金融NPOの厳しさである。厳しさとは多難な前途という意味ではない。資金を

当事者たちはプロとして、社会的な問題を解決している。しかし、他方で彼ら自身が場を得ることで、貢献の機会を与える。それはまだ管理の手の及ばざる広大無辺の地である。岩の間から漏れる水はいずれ大河として流れ、沃野を形成するだろう。そんな予兆を感じさせる。

社会生態学研究者  
森里陽一



書

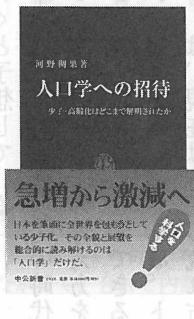
評

# 『人口学への招待』

河野稠果 著 中公新書 定価903円

人口とは考えてみれば、人間に便利なデータである。男女・年齢の別は人間的に制御困難であり、人は一年経てば必ず一歳年をとる。戦争や疫病でも起らない限り、その構造は比較的安定している。下手な景気や経済の統計を見るよりもはるかに役に立つ。実際に人口予測の精度は高い。本書によれば、一九六三年の国連世界人口推計は、二〇〇〇年の世界人口を六一億二九七三万人としたが、現実の二〇〇〇年の人口は六一億二四二二万人で、その誤差はわずかに〇・〇九%であったという。これは驚くべきことだ。

本来経済学も人口に関する資源分配の応用問題から派生している。その証拠に、古典派の経済学者たち、たとえば有名なマルサスの『人口論』、スマスの『国富論』、リカーノ



ドの地代学説にいたるまで、人口増加に関する危機意識を背景とする。ビジネスにおいても、人口分析は基本中の基本である。出店に際し、当該地域の人口が年齢別に把握されていなければ購買層も見当が付かない。さらには、自動車の保有率、児童数、女性比率なども重要な指標となる。ある成功したアメリカの企業家は、就寝時に地域の人口統計資料をめくるのを習慣としていたと聞いたことがある。しかし少なくとも現状において、人口論なる講座は日本ではほとんど見あたらない。経済学部出身者でも、このテーマを学ぶものはかなり稀少な部類に属する。ささらに現在にいたつては、單

に資源分配といった経済のみならず、離婚、晚婚化、女性労働、教育といった社会的要因も重要なものとなっている。それらに大胆に踏み込んで有力な仮説を示し、一般に流布された憶説を排除しようとする努力が見られる。

というのも、本書の主眼は、人口そのものに加え、人口構造を決定するさまざまな社会的・経済的原因であり、いわば広義の人口学である。メディアでもしばしば取り上げられる出生率や平均余命、生命表の概念など、基本的な知識が示されるとともに、各国ごとの人口構造の特性がいかなる要因により決定されるかについても幅広い知見を養うのに役立つ。専門家として一流の仕事をと思う。

さらには、本書で繰り返し指摘されるように、人口に関する概念の多くが誤解されている。評者自身、そもそも合計特殊出生率の概念を完全に誤解している。基本概念を捉え損なうと、ひいては少子化・高齢化に対して誤った将来見通しを示されてしまう。その意味で、よき啓蒙書の役割をも担っている。むろん基礎的な人口学的説明については、数式を使用しないことは一般には難しい。そのような部分が本書の序章から三分の一程度を占める。しかしここを我慢して読み進むと、豊かな地平が開けてくる。経済・社会的原因による説明がそれにあたる。ここまでくると、一気に読ませる筆力が光る。

著者は人口学の領域で長年一級の業績を上げてきた草分けである。本来、人口学のみならず専門的知識の啓蒙・普及はこの種の専門家によって担われるべきものである。一流の研究者が一般人との間の通訳に成功した見本のような書物といえる。

少子化・高齢化が変化の枕詞として常用される昨今、本当にこの語の意味を理解しているのだろうかと疑問を抱く方にお勧めの一冊である。

社会生態学研究者  
森里陽一



## 『高学歴ワーキングプア』

書評

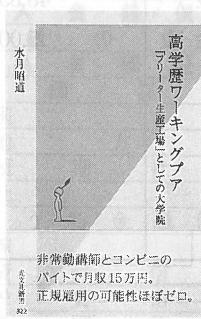
水月昭道著 光文社新書 定価735円

かつて「末は博士か大臣か」と言われた。今は博士号取得は足の裏の米粒といわれるらしい。その心は「取つても食えないが、取らないと気持ち悪い」だそうである。

経営体としてみた場合、大学という組織は特殊である。そこには、一八歳の学生から七〇を超える名誉教授まで、多年齢層の方がいたがそれぞの関心から活動をしている。普通の組織でこれまでの年齢層を抱えるところはちょっとないだろう。

そこでは、新たな知識の創出とともに、過去からのおのれの遺産を継承する役割もある。だから、しばしば批判される組織の古くさは、むしろ大学が持つ社会的使命に根差す部分もある。

しかし、人口構造の変化や世間の流れから存立の前提も次第に変わつて



に将来が有望であるかのような詐術(?)を使ったような大胆な論述までなされている。少々過激な氣がするが、述べられていることが「体感的」事実であることは間違いない。

もしこれで終わっていたら、本書はたんなる表層的なものにとどまつただろう。だが、後半になるとがらりとトーンが変わる。むしろ高学歴ワーキングプアの社会的な側面に焦点が移される。実際、本書で述べられてゐるとおり、そのような層の存在は、本人にとつてのみならず社会にとつての不幸である。

大学といえども、その社会的使命があつてはじめて存在が許されてゐる。社会から存在が「許されている」のである。高度の知識を修めつつ社会に身の置き場がないことは、資源の浪費であるばかりでなく、社会的罪悪であるゆえんである。

職を求める者ばかりの話ではない。現在大学に職を得る者もまた、自らの一蓮托生状況に危機感を持たなければならぬ。社会的使命も時代に合わせて変

化するし、数字のうえでも大学倒産が目前に迫るのは誰が見ても避けられないからだ。すると、いまだ職を得ざる人びとに大学以外の選択肢を手にするものと見ることもできる。

もはや「知識人」は戦略を変えるべきと本書は主張する。確かにそのとおりだ。現在、高度の知識や素養を有する職業など無数に存在する。後は知識と職との親和性の問題だけである。そのマッチングをうまくコントロールできない社会は、知識社会と名乗るべきではない。

現在のミスマッチ状況から生まれる不幸の数かずは、過渡的な変化から惹起される諸矛盾のほんの一端に過ぎない。だが、いまだ日本社会において大学は重要な価値尺度とされている。にもかかわらず、その実践的適用については途方に暮れている。いずれにせよ高学歴者の生態は、社会変動および適応能力の定性的尺度となることは間違いないだろう。

